

学苑 第八四五号 六五〇七一（二〇二一・三）

# 「狼森と笹森、盗森」を読む

——「聖なるもの」ならびに「人間たち」と「森たち」と——

遠藤 祐

## はじめに

「小岩井農場の北に、黒い松の森が四つ」と、「この森にかこまれた小さな野原」がある、という。ゆるやかな弧を描いて南北につらなる「森たち」と、この野原を定住の地ときめた「人間たち」とが、いかなる仕合わせにめぐり逢ったか——その次第をたずねる物語、「森たち」のひとつ、黒坂森の「巨きな巖」の「わたくし」に話して聞かせた「このおはなし」は、それを引き取った「わたくし」が、自分の言葉で語り継ぐことによって、彼の名付けた「狼森と笹森、盗森」の題と一緒に、われわれの手許に届く。すると「狼森と笹森、盗森」の物語は、「巨きな巖」の話に抛りつつ、ほかならぬ「わたくし」が紡ぎだしたもの、ということになろう。物語のそもそもの紡ぎ手であった「巨きな巖」も、ここでは作中人物のひとつと遇されているのが、読者の眼につくはずだ。とはいえこの最初の紡ぎ手を、「わたくし」が軽く見ていたわけではない。語りの後半と末尾とに、話をしたのは誰なのかが、再度確かめられているのだから。

「狼森と笹森、盗森」——それにしてもこれはおもしろい題だ、と思う。「わたくし」はそこに、黒坂森以外の三つの「森たち」の名前を掲げ、「狼

森と笹森」の二つと、「盗森」とを、「読点」で区切って、並べているのだ。が、そういうカタチは何ごとを指し示すのだろうか？ 狼森と笹森は近くにあること、ひとつだけ離れて盗森があること、そして「読点」の打たれたところに、実は黒坂森が名前を伏せて位置していることが、わかる。すると、「まんなか」に「巨きな巖」が座を占めるこの森は、「読点」とおなじく、文ならぬ「森のつらなり」に区切りをつける役割を果たす、ということも浮かがるだろう——そのようにするのは、「森たち」のなかで怪しい名をもつ盗森を、他と別にするためだ、ということも。

そこで、わたしは「狼森と笹森、盗森」の読みを、黒坂森とその主の「巨きな巖」の在り方をみるところから、始めよう。

## 1 「巨きな巖」と黒坂森のこと

「でき」たときには「まだ名前もなく、めいめい勝手に、おれはおれだと思つてゐるだけ」だった四つの「森たち」のうち、「名は体を顯わす」との諺どおり、九疋の狼の棲みついたのは「狼森」、「大きな笹」の下に山男の隠れていたのは「笹森」、そしてみるからに怪しげな、「まっくらな手の長い」男の居坐ったのは「盗森」と、なるほど「奇体な名前」がつ

いたのだが、「まつ黒な巨きな巖」の鎮座する森だけは例外で、「黒坂」というごく普通の地名で呼ばれるようになったところが、わたしの注意をうながす。名は体を〈顯〉わさない——そこに、みずからの正体を秘匿する「黒坂森」の、他の森並みでない別格の存在である所以を、求めることができよう。何しろこの森は、物語に語られているように、人びとがその「入口」に立って用件を告げたとき、「形を出さないで、声だけでこたへ」た、というのだから。尤も森の「形」をなす「まつ黒な巨きな巖」の姿が、〈黒い坂〉のイメージを導く……とみられなくも無いと思うけれども、しかしささかの無理が伴うことも、否めない。

黒坂森についてはいまひとつ、その成り立ち方が他の〈森たち〉とは異なることを、確かめておこう。すると、「狼・<sup>オウ</sup>・<sup>ヌ</sup>・<sup>ヌ</sup>・盗」の各森は、野原や丘に「穂のある草や穂のない草」が生い茂り、次いで「柏や松」などの樹々が「生え出し」て、まず森自体が形を成したあとに実体が定着したのだが、黒坂森の場合は、〈初めに<sup>(2)</sup>〉巨きな巖があった。巖はまわりの松の樹とともにあった。こうして森が生まれたという具合に、それらとは逆のなりゆきをたどっているのに気づく——森の「まんなか」に在って、堂々と口をきく「巨きな巖」の姿勢には、われこそ「初めに」この地に来りしもの、森生成の創始者なり——との自負が込められているとみられるだろう。そういう巖の前では、他の森の実体をなす狼たちも、<sup>ヌ</sup>に身をひそめた山男も、恐ろしそうな盗人も、たんなる〈宿借り主〉にすぎず、威張れたものではないわけで、黒坂森を別格の森とする根拠を、そこにも見いだすことができるはずだ。

ならばこの「巨きな巖」は、そもそものいかなる存在なのだろう？ 一種の風格を帯びて、物語のはこびのうえにゆるぎない位置を占めていられる

のは、どうしてなのか。「この森がいつごろどうしてできたのか、どうしてこんな奇体な名前がついたのか、それをいちはじめから、すつかり知つてゐるものは、おれ一人だ」(傍点引用者)は、わが身の上について巖の口にした言葉であって、だから彼は、物語の舞台に「初めに」われありきとの自負をもつ、と見られたわけだが、その彼は続いて次のことがらを「わたくし」に伝えた、という——「ずうつと昔、岩手山が、何べんも噴火しました。その灰でそこらはすつかり埋まりました。このまつ黒な巨きな巖も、やつぱり山からはね飛ばされて、今のところに落ちて来たのださうです。」と。

「わたくし」の取り次ぐこの一節に、「巨きな巖」はみずからの出自を、誕生の次第を、明かす——「ずうつと昔」と告げられているゆえ、太古とまではいかなくても、余程前のことに違いない。物語の舞台が「岩手山」の火山活動、おのれの活力を放射するこの働きによって、揺れていたころ、自分は「山からはね飛ばされて、今のところに」着地した、というのだが、そのなりゆきを、「山」の胎内にいた彼が勢いよく地上に産み落されたものと受け留めることが、読者に許されているだろう。すると先ほどのわたしの問いも、おのずから答えをえたことになる。「巨きな巖」とは、岩手山の血脈を継ぐもの、まさにその〈嫡出子〉にほかならない。他の森たちも、同様に噴火によって「はね飛ばされ」た火山弾をもとに生成されたはずなのに、それらは存在をまったく無視されていて、〈継子〉扱いを受けている、と言っている。ただし〈継子〉扱いにしたのが岩手山でないことだけはことわっておかねばなるまい。では誰なのか——は、いわく言い難いけれども、やはり「狼森と<sup>オウ</sup>・<sup>ヌ</sup>・<sup>ヌ</sup>・盗森」の作者がそうなのだ、と思う。

それはともあれ、ここでは「巨きな巖」、息子のひとりを地上に送り出した岩手山についても、触れておこう。この物語の岩手山は、四つの〈森たち〉のかこむ、地図上の「姥屋敷」が想定されたという「小さな野原」<sup>(3)</sup>の北方五キロ程のところに、標高二〇四メートルの山容を示して、そびえ立つ。したがって、それは物語空間の〈北の極み〉<sup>(4)</sup>に在るわけで、あたかも「双子の星」の《星めぐりの歌》に、「大ぐまのあしを きたに／五つのばした ところ／小熊のひたひの うへは／そらのめぐりの めあて」とうたわれる《北極星》とおなじ位置に立つ、と言えよう。全天と「小さな野原」との規模の違いは、問わずともよい。それぞれの空間における〈めぐり〉の軸として、すべての動きの〈めあて〉となる点で、双方のあいだに軽重はない。小さくはあっても、野原の〈人間たち〉の動きは、狼森訪問にはじまって、「西」から「北」を目指し、岩手山と出会って終わるのだから。

そういう岩手山は、物語内の諸情況が具体的に動きだし、それらの語られる「今」、無秩序だった物語の舞台を整える〈仕事〉を成し終えて、〈休息〉のひとつときを迎え、地に在るものの「頭上」、天際の高みから、静かにそれらのなりゆきを見守り、毎年秋の末から冬にかけては「銀の冠」をかぶったみずからの〈聖なる容姿〉を、〈被造物〉たちの上に顕わす。物語の〈はじめ〉に「ある年の秋、水のやうにつめたいすきとほる風が、柏の枯れ葉をさらさら鳴らし、岩手山の銀の冠には、雲の影がくつきり黒くうつゝてゐる日でした。」との語りが、そして〈おわり〉近く、「盗森の黒い男」をたしなめたところに「いや／＼、それはならん。」といふはつきりした厳かな声がありました。／見るとそれは、銀の冠をかぶった岩手山でした。」との語りがあることに、注目しておこう。

「今」の岩手山のそのイメージは、旧約聖書の伝える《神》の姿を、わたしの裡に喚び起す。とくに《天地の創造》の《第三の日》に、《神は言われた。／「地は草を芽生えさせよ。種を持つ草と、それぞれの種を持つ実をつける果樹を、地に芽生えさせよ。」／そのようになった。》<sup>(4)</sup>との記述にひきつけられて、そう想う。それを含めて《御自分の仕事を完成され》、《第七の日》に《御自分の仕事を離れ、安息なさった》この《神》のよう<sup>(5)</sup>に、「盗森の黒い男」をたしなめ、盗品返還の手筈をとることにきめ、「すましてそらを向」いた岩手山も、自分を仕事から解放して《安息》の境地に在る、と見られるのではなからうか。

## 2 〈わたくし〉と物語のはこび

「狼森と策森、盗森」の登場人物たちを、ひとわり見てきたのだが、物語を語り継ぐ「わたくし」もその一人に数えていいのかもしれない。彼も物語の舞台に姿をあらわし、余人を容れぬ黒坂森の「まんなか」に身をおいて、「巨きな巖」の話を聴くことができたのだから。すると、彼は森の主から好遇されたと見られるのだが、ならばそういう「わたくし」とはいかなる人物なのか――が、気になって来よう……。そこで憶いだされるのが、「狼森と策森、盗森」とともに、童話集『注文の多い料理店』に収録された「鹿踊りのはじまり」の舞台となった「苔の野原」に身を横たえ、眼をとじて、物語を「秋の風から聞いた」と告げる〈わたくし〉の在り様にはかならない。こちらの〈わたくし〉もまた聞き役として物語内に登場したのち、聴いたところをおのれの言葉で身を入れて語り継ぐ、という姿勢を示して、物語生成の一翼を担う。その在り様はまさに黒坂森を訪ねた〈わたくし〉とひとしく、それゆえこの二人を同一の人物とする根拠を、

そこに求めることが認められてよい。

という次第で、気になる「わたくし」とは、かつて触れたとおり「〈俗なるもの〉の影を宿さない……〈無心〉の存在」「純粹で透明な自然に強く引かれるもの」<sup>(6)</sup>であると、受け留めておく。であるなら、「巨きな巖」が彼をためらわずに迎え入れたことも、うなずける。

ところで、「鹿踊りのはじまり」には三つのときが経過しているのだが、同様に「狼森と笹森、盗森」にも、〈森たち〉と〈人間たち〉のあいだに様々なでき事が起きたときと、それを、「巨きな巖」が「わたくし」に話して聞かせたときと、受け継いだ「わたくし」が語るとき——が流れていく。その三つは、どれもいつと特定しにくいけれども、ただ第三のときだけは、読者のひとりひとりが物語に接する〈今〉こそそれ——と見なすことができよう。その意味で「狼森と笹森、盗森」は〈現在に生きる物語〉なのであって、人びとが忘れてしまわないかぎり、語る「わたくし」の声は世に響き続けるに違いない。

では第二のときはどうなのか。「狼森と笹森、盗森」冒頭のすでにみた一節、自分が聞き役として登場した次第を紹介する「わたくし」の語りを振りかえると、そこに「黒坂森のまんなかの巨きな巖」<sup>(7)</sup>が、ある日、威張つてこのおはなしをわたくしに聞かせました。「(傍点引用者)と語られていたのに、あらためて気づく。「このおはなし」のもろものでき事が終わってから、傍点を付した「ある日」までに、どれほどの時間が経ったのだろうか？ すべてが片づいたあとの状況を「わたくし」が告げる一節——「さてそれから森もすっかりみんなの友だちでした。そして毎年、冬のはじめにはきつと栗餅を貰ひました。／＼しかしその栗餅も、時節がら、ずるぶん小さくなつたが、これもどうも仕方がないと、黒坂森のまん中のまっ

くろな巨きな巖がおしまひに云つてゐました。」をみれば、双方のあいだには、それ相応の隔たりがあるけれど、しかしはるかなものでないことがわかる。「毎年」繰り返された〈栗餅の贈答〉が、大事な年中行事としての意味を失わず、「ある日」を含む物語の年にもまだ続いているのだから。なお、「わたくし」が、「巨きな巖」に聴いたところを鮮かにいきいきと語り、巖を主とする「この森が私へこの話をしたあとで、私は財布からありつきの銅貨を七銭出して、お礼にやつたのでしたが、この森は仲々受け取りませんでした、この位気性がさっぱりとしてゐますから。」と、感慨深く口にしてるので、「ある日」はまた、「わたくし」が直接人びとに語り掛けたときにほど近い、と認められるだろう。

そこで、「わたくし」のもたらした、〈森たち〉と〈人間たち〉とがいかなる仕合わせにめぐり逢ったか——をたずねる「狼森と笹森、盗森」の物語のはこびを、「わたくし」に導かれて、わたしもたどってみることにしよう。

物語をひらいて、読者がまず接するのは、すでに見た〈前口上〉の一節、「わたくし」が「このおはなし」を耳にした次第を、簡潔に示して終わるのが、幸いだ。ちなみに物語末尾に付加された一節、事後の状況を言う〈口上〉も同様に短い。物語のはこびにおいて、首尾を照応させて、語りの体裁を整える語りの思いの、そこにかがえるのが興味深い。こうして「狼森と笹森、盗森」のはこびも、「鹿踊りのはじまり」がそうであるように、〈物語の本体〉の前と後に短い〈口上〉を配置した三部から成ることが、明らかとなる。そのことを確かめたうえで、「ずうつと昔、岩手山が、何べんも噴火しました。その灰でそこらはすっかり埋まりました。」の語りとともに、物語の幕が開き、舞台の状況が見えてくるところに、眼



を向けよう。

事の起りは「ある年の秋」の末、「銀の冠」をいただいた岩手山が、静かに地上を見守る「日」のこと。「四人の百姓」が舞台に登場したときから、物語は一気に動きだす。彼らは自分たちのつとめである営農に適した土地を捜していた自営農民で、そのうちの一人が「こゝ」に眼をつけ、仲間を誘って、「この森にかこまれた小さな野原」<sup>(8)</sup>へ乗り込んできたのである。「そこら」をさしつづつ土地柄のよさを説く彼に促されて、「地味」をためし、定住を決めた皆の言葉、初めて物語空間に響いた生命あるものの声によって、「幻燈のやう」に美しいけれどもどこか頼りないあたりの「けしき」は、物語のなかに、そのなりゆきを支える〈場〉として安定するようになるところが、おもしろい。四人が「そこでよろこんで、せなかの荷物をどしんとおろして」、すゝきのかげに控えさせた家族を呼び集めたのは、「こゝ」の安定性をはっきり感じ取ったからに違いない。

〈森たち〉の前に家族一同が顔を揃えた「そこで」、「四人の男たち」のといった行動は、物語の成立にかかわる重い意味を担う。「こゝへ畑起してもいゝかあ」「こゝに家建ててもいゝかあ」「こゝで火たいてもいいかあ」「すこし木貰<sup>きいもら</sup>つてもいゝかあ」と、四度繰り返される呼び掛けには、この〈場〉に息づく自然の生命の尊厳をないがしろにしない、彼らの想いがこめられていよう。だから〈森たち〉もこころよく、応諾の意をあらわすのだ。もしも、ここで〈人間たち〉が自分の思わくだけで事を進めようとしたならば、たちまち自然の怒りを買って、彼らの〈森たち〉との交渉は御破算となり、物語そのものが歩みだされずに終わることになったろう。

そのようにして、「わたくし」の物語はまず農民四家族の、開拓地として選んだ「小さな野原」への入植の次第を明らかにし、「森」の眼にした

そこでの「次の日から」の状況と、人びとのために「冬のあいだ、一生懸命、北からの風を防いで」やった「森」の在り様とをつけ加えて、第一段の語りに終止符をうつ。ところが入植の実現したのち、年毎に、思い掛けぬでき事が開拓地に生じ、人びとに驚きと不安を与えたために、物語もそのなりゆきをたどることとなって、次々と、豊かな語りが読者に披露されていく。それらはいずれも、人びとが〈稔りの秋〉を悦<sup>よろこ</sup>んで間もない、晩秋、初冬のある「朝」に起きているのが、注意されていい。のみならず、入植のはじまったときも「ある年の秋」の「水のやうにつめたいすきとほる風」が吹き、岩手山は雪をいただく「日」であったことを思いだすと、「狼森と笹森、盗森」の展開の軸となるでき事はみな、きっちりと一年ごとに出来<sup>しゅつたい</sup>しているのが、明らかになる。ちなみに、開拓地での最初の事件は、幼い四人の〈子供たちの失踪〉。あわてた大人たちはあちこち捜したあげく、森に眼をつけ、「まづ一番ちかい狼森<sup>オウモリ</sup>に行き」、九疋<sup>くひき</sup>の狼と遊ぶ子供たちを連れ戻す。物語のはこびのうえで第二段となるそれは、〈人間たち〉と〈森たち〉の交歓のはじまりであって、次の年の〈農具の紛失〉<sup>(第三段)</sup>も「笹森<sup>ささもり</sup>」とその実体の「黄金色<sup>きんいろ</sup>の目をした、顔のまっかな山男」と、次の次の年の〈栗の喪失〉<sup>(第四段)</sup>も「盗森<sup>ぬすもり</sup>」の正体の「まっくろな手の長い」大男と、それぞれ「友だち」になるきっかけをつくった事件に、ほかならない。

かえりみて、この物語には同一性が強く意識されている、と思う。それは〈狼<sup>オウ</sup>と笹<sup>ささ</sup>と黒坂<sup>くろさか</sup>、そして盗<sup>ぬす</sup>〉の四つの「森にかこまれた小さな野原」という唯一の《場》に成り立つのだし、その仕組みを担う四つのでき事が、まったくひとしい《時間》を隔てて秩序正しく並ぶのも、その標識<sup>しるし</sup>とみられよう。しかし例外の事態もないわけではない。「星めぐりの歌」に合わ

せてまわる、北極星を中心とした全天の整然たる運行をかき乱すアウトロ  
ー、「双子の星」の「大きな乱暴ものの彗星」に似たものが、ここにも登  
場して、問題をひき起こす。先に名を挙げた「盗森」の大男がそれで、曲  
者の粟盗人相手の交渉はすんなりと出来ない。そのことを見越したかのよ  
うに、第四段〈粟の喪失〉のはじめの語りは、〈子供の失踪〉〈農具の紛失〉  
の段のそれと微妙に異なっている。具体的にみてみよう。

「春になつて、小屋が二つになりました。／そして蕎麦と稗とが播かれ  
たやうでした。そばには白い花が咲き、稗は黒い穂を出しました。その年  
の秋、穀物がとにかくみのり、新しい畑がふえ、小屋が三つになつたと  
き、みんなはあまり嬉しくて大人までがはね歩きました。ところが、土の  
堅く凍つた朝でした。九人のこどものなかの、小さな四人がどうしたの  
か夜の間に見えなくなつてゐたのです。」(1 傍点引用者)

「春になりました。そして子供が十一人になりました。馬が二疋来まし  
た。畠には、草や腐つた木の葉が、馬の肥と一緒に入りましたので、粟や  
稗はまつさをに延びました。／そして実もよくとれたのです。秋の末のみ  
んなのよろこびやうといつたらありませんでした。／ところが、ある霜柱  
のたつたつめたい朝でした。／みんなは、今年も野原を起して、畠をひろ  
げてゐましたので、その朝も仕事に出ようとして農具をさがしますと、ど  
この家にも山刀も三本鋏も唐鋏も一つもありませんでした。」(2 同前)

「次の年の夏になりました。平らな処はもうみんな畑です。うちには木  
小屋がついたり、大きな納屋が出来たりしました。／それから馬も三疋に  
なりました。その秋のとりいれのみんなの悦びは、とても大へんなもので  
した。／今年こそは、どんな大きな栗餅をこさへても、大丈夫だとおもつ  
たのです。／そこで、やつぱり不思議なことが起りました。／ある霜の一

面に置いた朝納屋のなかの粟が、みんな無くなつてゐました」(3 同前)

次第に豊かさをましていくな開拓農家の様子が、どれにも見られて嬉しい  
のだが、傍点の個所に語りの違いがみられよう。人びとの大きなよろこび  
を帳消しにする不幸な事件の発生——事態のそのなりゆきを、(1)と  
(2)は逆接のかたちで語るのに、(3)では、むしろ順当な接続を表わす、  
〈それで・それゆえ〉の意の「そこで」が用いられているのは、なぜだろ  
う？ 至福のときの享受は、「やつぱり」理解をこえた、わけのわからぬ  
〈不思議〉を招く——との意味なのか。あるいはそこに「よろこびは識を  
なす」というこのころの動くのを、読み取っていいのかも知れない。語りは  
やはり「そこで」の先に、〈凶〉を推測しているように思われる。

はたして盗森の交渉は、大男の怒声に圧されて難局に逢着し、人びとは  
「お互に顔を見合せて逃げ出さうとしました」と、語りは告げる。物語の  
はこびで唯ひとつの危機的状況の示されるこの個所に、「狼森と笹森、盗  
森」のクライマックスが求められていい。「すると」まさにそのとき、〈聖  
なるもの〉岩手山が救いの手をさしのべて、急転直下、事態は解決に向か  
うのだから。

#### おわりに

蛇足をひと言——物語本体の四段のはこび、四つの森と農民たちの四家  
族、入植の許可を求めたときの四度の呼び掛け、幼な子四人の〈失踪〉な  
どなど、「狼森と笹森、盗森」は〈四〉に縁が深い物語なのだが、その辺  
の吟味は、のちの機会に譲りたい。

〔注〕

- (1) 本論における「狼森と笹森、盗森」のテキストは、ちくま文庫版『宮沢賢治全集8』所収のそれを使用した。
- (2) 「ヨハネによる福音書」第一章冒頭の表記を借りた。「巨きな巖」の存在の重味を示すために。引用は『聖書 新共同訳』に拠る。
- (3) 原子朗著『新宮澤賢治語彙辞典』（東京書籍、一九九九・七 第一版第一刷）の〈狼森、笹森、盗森、黒坂森〉の項を参照した。
- (4) 「創世記」第一章一節。引用は注(2)におなじ。
- (5) 「創世記」第二章二節。引用は注(2)におなじ。
- (6) 拙論「鹿踊りのはじまり」――〈風〉のはこんだ物語」『宮澤賢治の物語たち』洋々社、二〇〇六・六 初版第一刷）を参照されたい。
- (7) 字数にして、前者は一六五字、後者は一一八字。
- (8) 精確にはへこの、森にかこまれた小さな野原」とあるべきだろう。

（えんどう ゆう 元本学教授）